

たねのふしぎ

2年4組30名

1. 単元名 「秋となかよし ～たねのふしぎ～」

2. 単元の目標

- ・身の回りの自然の様子や四季の変化に気付くとともに、身近な自然を利用した遊びの面白さや自然の不思議さに気付くことができるようにする。
(知識及び技能の基礎)
- ・秋の自然を見つけたりする活動を通して季節の変化を感じたり、自然物や身の回りのものを使った遊びをそれらがもつ特徴を捉え、工夫して作ったりすることができるようにする。
(思考力、判断力、表現力等の基礎)
- ・身の回りの植物に対して興味をもてるようにするとともに、それらを取り入れ、自分の生活を楽しくしようとするようにする。
(学びに向かう力、人間性等)

3. 指導について

(1) 児童について

【6月実施 生活科学習に関するアンケート 対象2年4組児童30名】

アンケート項目	とても思う	思う	あまり 思わない	思わない
① 生活科の学習は、楽しいですか	70%	27%	3%	0%
② 野菜や、花を育てるのは好きですか	70%	27%	3%	0%
③ 身の回りの花や生き物を見つけるのは好きですか	53%	27%	17%	3%
④ 自分で考えたり、工夫したりして、遊ぶものや、おもちゃを作るのは好きですか	77%	17%	3%	3%

本学級の児童は、幼稚園・保育園で、落ち葉で絵を描く、落ち葉をビニールシートに大量に集めてもぐりこんだり、飛び込んだり、かけあいっこをしたりする、大きな葉をちぎって別の形の物を作るなどの遊びを経験している。

1年生では、春の校外学習として地域の公園へ遊びに行き友だちと遊んだり、秋には公園へ出かけ、そこで拾ってきたどんぐりなどを使ったおもちゃ作りをしたりするなど、身の回りの自然と関わる活動を行っていた。一方、動植物を育てる活動においては、学校の改修工事の関係もあり十分に行うことができなかったため、2年生では夏野菜と冬野菜の計2回の栽培活動の機会を設けた。

2年生の6月に実施した生活科学習に関するアンケートの結果から児童の97%が生活科の学習を楽しんでいる。おもちゃ作りの学習では、家庭から牛乳パックや空き箱、プラスチックトレイ、トイレトペーパーの芯などおもちゃの材料となる物を積極的に集め、十分な材料のもと学習に打ち込むことができた。1年生を招待し、自分たちの作ったおもちゃで遊んでもらいたいという言葉も児童から飛び出

し、そのためには作ったおもちゃがどんな動きをすればいいのか、自分たちが作ったおもちゃで本当に1年生に楽しんでもらえるかを話し合い、改善しようとする姿も多くの児童に見られた。

これらの実態からも、児童は積極的に生活科の学習に取り組み、自分たちの生活を豊かにしようとする願いをもって感じるように感じられる。ただその一方で、昨今の課題として挙げられている生活体験の少なさや、直面した問題を自分たちの力で解決しようとする力が乏しいように感じられる。

野菜を育てる学習では、「今の時期にプランターでどんな野菜を育てることができるかな。」と問いかけた際、収穫時期を大きく外れた野菜を挙げたり、ミカンやスイカ、サツマイモなどのプランターで育てるには不向きな物を挙げたりする児童が多く見受けられた。このことは今の時代、スーパーに行けば年中ほとんどの野菜を入手することができるようになったことや、収穫された実や葉の状態ですべて売られているものがほとんどで、それらが植物の一部だということを認識しづらいことが要因の一つであると考えられる。また、家族と買い物に行ったり、調理を手伝ったりするなどの体験も少なく、調理された状態でしか野菜を認識していなかったり、自分が何という名前の野菜を食べているのかさえ認識していない児童がいることも給食中の会話の中からうかがえた。

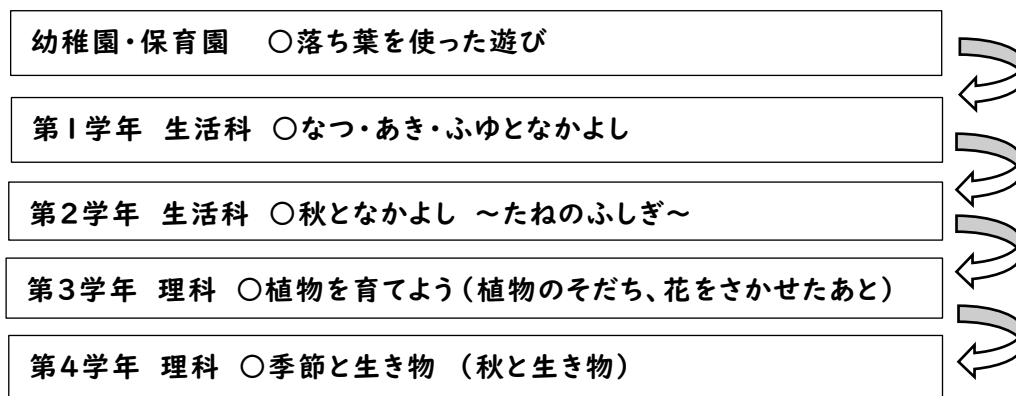
また、普段どのような遊びをしているかという質問に対して、外遊びをしている児童は少なく、自然物を使って自分で遊ぶ物を作ったり遊びを考えたりしたことのある児童は少ない。最近では既製品として完成度の高いおもちゃが数多く入手可能であり、テレビゲームや動画視聴の手軽さなども相まって、わざわざ自分で遊びを考えたり作ったりしなくても家の中で十分に楽しむことができる。本来、楽しい活動である自分で遊びを作ったり考えたりしながら問題点を見つけ、さらに面白く改良していくような経験が不足していることから、普段直面した問題に対しても、自分たちの力で解決しようとする力が乏しいように感じる。すぐに「わからない」「できない」とあきらめてしまったり、教師に答えを求めたりする傾向が強く見受けられる。これらの傾向は他教科でも同じである。

これらのことから、身近な自然物との直接的な関わりを繰り返す中で、それらに強く興味をもつようになり、自分たちの生活に積極的に取り入れて、自分たちの生活をより楽しくしようとする態度を育成したい。また、児童自ら知りたい、調べてみたい、試してみたいという願いが連続するように綿密に単元計画を練り、自分たちの力で問題を解き明かしていく達成感を感じ取らせるようにしたい。

(2) 単元について

本単元「秋となかよし ～たねのふしぎ～」は、小学校学習指導要領生活科の内容(5)「身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりする活動を行う。」を受けて設定したものである。

学習内容の系統性



身近な自然に浸り、四季の変化を楽しむことは、諸感覚を磨いたり感性を豊かにしたりする上で重要な体験である。自然体験の少なさが課題として挙げられる中、幼児期から児童期に至る成長の過程に

において、自然に触れ合う体験や季節に応じて自分たちの生活を工夫する体験が求められている。

地域の公園に赴き、そこに自生する多種多様な植物と出会うことは、児童にとって楽しい活動であり、とりわけ実や種といった自然物は、その形状から児童の興味をひくものであると考える。また、1年生では、地域の公園で見つけたどんぐりなどの自然物を用いたおもちゃ作りを行っている。2年生では、公園で見つけた自然物に限定せず、校区内にある多種多様な植物の実・種・葉や花などを自ら発見、収集し、集めた自然物を使って遊びたいという願いをもてるよう導きたい。その中で、ひつつく実や種の形、色、大きさ、ひつつくしくみ、飛ぶ種の形、色、大きさ、飛ぶしくみ、転がる種の形、大きさ、転がり方などの違いを発見して、自然の多様性や不思議さに気づき、自然の素晴らしさを感じ取ることができるようになることが、本単元の本質である。

また、自然物を収集し、直接五感を用いてじっくりと観察することによって諸感覚を磨き、集めたものを比べたり、関連付けたりしながら遊びに生かすことは、3年生からの理科学習の素地となる活動であると考えられる。

校区の秋の自然教材

通学路…アメリカセンダングサ、オキノゲシ、アキノノゲシ、ハナゾノツクバネウツギ、ヨウシュヤマゴボウ、セイタカアワダチソウ、セイバンモロコシ、カタバミ、エノコログサ、ススキ、ホシアサガオ、イヌタデ、カンイタドリ、ヒメムカシヨモギ、オニタビラコ、ホトケノザ、メリケンカルカヤ、オオバコ、オヒシバ、コマツヨイグサ、シマスズメノヒエ、タチスズメノヒエ、ダールベルグデージー、ヒガンバナ、フヨウカタバミ、アメリカイヌホオズキなど

高田川沿い…アメリカセンダングサ、オオオナモミ、アレチウリ、セイバンモロコシ、エノコログサ、ススキ、ヨシなど

学校内…クスノキ、アメリカセンダングサ、アメリカイヌホオズキ、イヌムギ、エノコログサ、オシロイバナ、オニタビラコ、カタバミ、ススキ、セイタカアワダチソウ、フヨウカタバミ、イチヨウ、イロハモミジなど

八幡神社…シラカシ、トウカエデ、サルスベリなど

見立山公園…メリケンカルカヤ、アレチヌスビトハギ、アキノノゲシ、イロハモミジ、イチヨウ、コナラ、クヌギ、クスノキ、マツ、ススキ、エノコログサなど

本単元は、「①身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、②それらの違いや特徴を見付けることができ、③自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることや気付くとともに、④それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする」ことを目標とする。

「①身近な自然を観察したり、季節に関わったりするなどの活動」とは、実際に野外に出かけ、そこで見つけた植物や生き物、石や土などの自然物と直接触れ合い、その形、色、大きさ、手ざわり、動きなどに注意を向けたり、それらに関わったりすることである。児童は、タンポポの綿毛を見つければ、息を吹きかけ綿毛を飛ばしたり、セミの鳴き声が聞こえれば、どの木にセミがいるのか注意深く探索したりするなど自然に対して興味をもつ。そして、タンポポの花の匂いや、綿毛がふわふわ飛ぶこと、音が鳴る方向を注意深く探しセミを発見したり、鳴き声によってセミの種類を判別したりするなど、諸感覚を使って繰り返し自然と触れ合う。そこには、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などを使って自然の素晴らしさを十分に味わおうとする姿が生まれる。繰り返し自然と触れ合うことで、タンポポの花の構造、色や形、セミの鳴き方や住処に注意を向けるようになる。このように、自分なりの思いや願いをもって身近な自然物をじっくりと観察し没頭させたいと考える。

「それらの違いや特徴を見付けることができる」とは、児童が身近な自然に興味をもち、それらを観察したりそれらに関わったりすることを通して、そこには同じ性質や変化があること、異なる特徴や違いがあること、時間の変化や繰り返しがあることなどに注意を向け、自覚することである。例えば、秋にどんぐり

を拾って遊ぶ活動では、たくさんのどんぐりを集めることで、大きさや形、色などで分けたり、並べたりして遊ぶようになる。身近な自然物と直接触れ合ったり繰り返し関わったりすることで、自然の違いや特徴を見付けることができるようになると思う。

「自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わること気付く」とは、身近な自然の共通点や相違点、季節の移り変わりに気付いたり、季節の変化と自分たちの生活との関わりに気付いたりすることである。児童は学校周辺や学級園、通学路、地域の公園などと繰り返し関わることで、そこで自然の特徴や変化に気付くようになることが考えられる。春にはサクラやタンポポ、カラスノエンドウ、シロツメクサなどが観察できた場所が夏にはドクダミ、ヒマワリ、トマトやピーマンなどの夏野菜に変わり、秋になればコスモス、ヒガンバナ、エノコログサ、キンモクセイ、紅葉したモミジやカエデとなり、冬になれば花を咲かす植物を道端ではあまり見なくなる。こうした気付きを一人一人が振り返ったり、学級で交流したりすることで、季節感をより確実にしていくことができる。また、季節感の獲得や身近な自然との関わりにより、児童は季節の花を飾ろうとしたり、自然物で遊びを生み出したりするなど、自らの生活に取り入れ生かそうとすることができると思う。

「それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする」とは、自然との触れ合いや関わりの中で、気付いたことを毎日の生活に生かし自分自身の生活を楽しく充実したものにしていくことである。前述したように、季節感の獲得や身近な自然との関わりにより、季節のものを飾ったり、自然物で遊んだりすることで児童は身近な自然や季節の変化を自分たちの生活に取り入れようとする。そうした場面を取り上げ実際に行うことで、生活の中に自然や季節があることの心地よさや快適さ、清々しさなどを感じ、自らの生活を潤いのあるものにしていくことができると思う。

身近な生活に関わる見方・考え方

第1次では、季節が夏から秋に変化することで、自分たちの身の回りの様子の変化していることを、地域の公園へ秋見つけに行く活動から捉え、秋のよさについて考えさせる。また、公園に自生している自然物に目を向けることで、植物の多様性に気付かせ、自分たちの身の回りにある植物に興味関心を抱かせたい。

第2次では、自分たちの身の回りにある植物の収集活動を通して、季節による植物の変化を捉えさせる。また、収集した植物がもつ外観上の特徴や形状の違いを捉えることで仲間分け遊びを楽しませたい。

第3次では、収集した植物の特徴を生かした遊びを考えていくなかで、身の回りにある自然物は、いろいろな遊びに利用できることや、遊びを工夫したり遊びをつくりだしたりすることの面白さに気付かせたい。また、遊びの中から生まれる疑問を納得いくまで追究する問題解決的な学びは、上学年での探究的な学びの素地になると考える。その際、「見る」「触る」などの諸感覚を用いて集めた直感的な事実と、虫眼鏡やタブレットなどを用いて拡大して詳しく観る観察的な事実をつなげて考えをつくり、他者との対話を通して互いの考えを比較、関連付けながら深い考えを導き出して遊びに取り入れるようにしたい。

(3) 指導について

本単元は、児童の身近な自然物との出会い、直接的な関わりを大切にしながら活動を行っていきたい。今までは曖昧であったり無意識に関わっていたりする身近な自然物と意図的に出会わせることで、児童の中で気付きや願い、疑問が生まれていく。そうした一人一人の気付きや願い、疑問をスケッチや文章で記述させ表現させることによって確かになり、交流することで共有され、そのことをきっかけとして新たな気付きが生まれたり、様々な気付きが関連付けされたりする。各々の気付きを比べたり分類したりすることによって、自分の気付きと友だちの気付きとの共通点や相違点、それぞれの関係や関連が確認

され、気付きの質を高めることができる。自分自身の気付きや願い、疑問を表現することにより、気付きの質が高まり、対象が意味付けられたり価値付けられたりすることにより、身近な自然は一層自分にとって大切な存在となってくる。このような「深い学び」の実現を目指したい。

第1次では、まず、教師が地域の公園に誘い、そこで様々な植物の花、葉、実や種に出会わせる。そこで児童は直接的に自然の中で遊んだり、自然物を集めたりする活動を通して、興味をもつ色、形、手触りや匂い、現象に気付く。後に種や実の学習につなげられるよう、事前に公園内にある植物について調べ、様々な種子散布の方法を見つけられる場所や、季節の変化を捉えやすくするために、紅葉しはじめの時期を狙って公園へと出かけるようにする。今回児童と秋見つけを行う公園には、①動物散布型（アレチヌスビトハギ）②風散布型の中でも羽があり、回転しながら落下する植物（イロハモミジ、マツ）③風散布型の中でも綿毛がついている植物（アキノノゲシ、ススキ、メリケンカルカヤ）④動物散布型と重力散布型の多型散布（クヌギ、コナラ）などが自生していることが確認できている。また、児童一人一人にビニール袋を持たせ、学校に持ち帰ることができるようにした。このことで、児童は気になったものを好きにビニール袋に入れることができ、持ち帰った後にもじっくり観察することができる。公園での秋見つけの際には、様々な植物を発見した児童を紹介することで、「もっと他にもないかなあ」「こっちにも同じものを見つけたぞ」と主体的に植物を探せるよう、適宜声掛けを行いたい。また、探しているうちに、アレチヌスビトハギの実をズボンにつける児童がいることが予想されるので、ここで全体に取り上げたい。どこでついたものなのか、ついたものは何なのかを投げかけ、調べてみたいという主体的な活動へとつなげたい。学校に戻った後は、持ち帰ったものを机の上に広げながら観察カードにスケッチや文章で記録させ発表させる。ここでは、自分が集めたものと友だちが集めたものを対比させ、大きさ、色、形などの違いに注目させたい。この公園ではクヌギとコナラという2種類のどんぐりを採取することができる。おそらく児童にとっては同じ「どんぐり」という位置づけだろうが、実の大きさや形、殻斗の違いなどから、違う種類の木になるとどんぐりであることに気付かせたい。また、アキノノゲシは多くの児童がタンポポだと認識することが予想される。そこで、植物の全体写真を提示したり、児童が葉を採取していれば、葉の形などからタンポポに似た特徴をもつものの、違う種類の植物であることに気付かせたりしたい。観察カードには気付いたこと、気になったことや、疑問に感じたことも書くように促したい。おそらく、「別の公園にも秋見つけに行きたい」や「もっといろんな植物を探してみたい」「見つけた秋の自然物で遊んでみたい」「ひっつきむして何なんだろう」「どうやってくっついてるんだろう」などの記述があると予想される。このように、数多くの植物に直接出会わせたり、集めさせた自然物をクラスで発表する活動を十分に行ったりすることで身の回りには様々な種類の植物があることや、季節が秋へと変わっていくことで、地域の様子が変化していくことを体感できるようにしたい。

第2次では、「もっといろんな植物を探してみたい」という児童からの主体的な活動になるよう導きたい。通学路や地域の公園、神社や寺、学校の校庭などから見つけた植物を教室に持ち込み、発表させる機会を設け、さらに植物への興味関心を引き出していきたい。友だちが持って来た植物を見て「自分の家の近くにも同じものが咲いている」や「この植物は前に公園で見つけたものとよく似ているな」などの気付きを大切にしたい。同じ植物でも広範囲にわたって自生していることや、植物がもつ共通点、相違点に気付くことは、今後の活動の基礎となる。持ってくるのが困難なものに関しては、写真を撮ってロイロノートで共有しても良いこととする。また、児童の多くが、植物を花が咲いているか咲いていないかで判断することが予想されるので、花の採取だけで終わらないよう、葉や花の咲いた後にどんな実ができるのかにも興味を向けさせたい。継続的な観察によって、植物が姿を変えていくことを実感としてもたせたい。地域で自生している植物に関しては、事前にフィールドワークを行い、写真を撮ったり、採取できるものに関しては採取したりしておく。植物名を調べておき、児童に聞かれた際には名前を教えるのも良いと考える。児童にとって、道端の植物はすべて名も無き雑草という認識であることが予想される。教師が植物名を教えることで、今まで雑草だと思っていた植物にも名前があることを知り、さらに興味をもつこ

とができるようになることを考える。また、名前が分からない植物を教室に持ち込んだ際には、どのように調べられるか全体に問いかけてみる。おそらく「ネットで調べる」「図書室で調べる」「図鑑を読む」などの回答が予想される。そこで、図書室を利用する際には、それとなく児童に声掛けを行いたい。自分たちの力で植物名を発見したり、今まで見つけた植物が本で紹介されているのを発見したりすれば、自ずと興味関心が高まる。そのような児童をさらに全体で紹介したり、児童が発見した植物名を語らせたりすることで、一層主体的に学ぼうとする姿勢を強くしていきたい。

また、児童の探究心をさらに向上させたり、自然の多様性や不思議さに気付いたりできるよう、教師がアルソミトラやツクバネなどの特徴的な実や種の実物を用意しておき、実際に見せられるように準備しておく。

第3次では「みんなで秋のものをたくさん集めましたね。これからどうしますか。」と問いかけ、子ども自ら、それらを使って遊びたいと願うように導きたい。1年生では秋に集めたどんぐりを使ってこまなどを作っている。ここでは、それ以外の物を使って遊びを広げるように働きかける。遊びを考える際には、児童一人一人が自然物を手に取り、心行くまで触れ合える時間を確保することで、それらの特徴を捉え、遊びに生かせるようにしたい。綿毛や羽のついた種を使って遠くまで飛ばす遊びを作りたいと願う児童もいれば、ひっつきむしを使って的当てを作ったり、多くのひっつきむしを用いて絵を描いたりしたいと願うだろう。そのために、児童が興味関心を持つと思われる植物の実や種、遊びに使う材料や道具を大量に用意したい。また、自分の遊びのために必要な材料を生活の中から探して再利用するように呼びかけ、子どもの主体性やエコ意識を高めていきたい。

互いの遊びづくりが見えるように、教室に各自のポートフォリオを自由にみられるコーナーや、製作途中のものを保管するコーナーを設けたい。

授業ごとに振り返りを行わせ、その1時間で試したことやそこから気付いたこと、気になったこと、次の時間に試してみたいことやそのために必要な準備物などを書かせ、児童の思考を教師が把握し、それにもとづいて必要になりそうなものを追加で準備できるようにしたい。また、遊びで使っている実や種について追究したいという児童がいれば、個別に気になったことを試しながら、遊びに生かしてよい事とする。例として、ひっつきむしを使った遊びを考えていく中で「ひっつきむしの正体は何だろう」「どうやってひっついてるんだろう」「ひっつくものとひっつかないものの違いは何だろう」などの疑問が生まれてくることが予想される。これらの疑問に対して「よく見てみる」「触ってみる」「割って中を見てみる」などの五感を活用して、直接調べる方法を助言したい。繰り返しの徹底した観察活動で気付いたことなどを絵や文章でまとめ、遊びに生かせるよう導きたい。また、そういった個別の学びができるよう、ルーペやデジタル顕微鏡、送風機やメジャーなどの道具を用意しておき、心行くまで探究できる環境を整えたい。

十分に遊びづくりに没頭し、自ら探究したいと思うことを心行くまで探究させる活動を行うことで、児童は、自分の遊びの楽しさや探究したことを、友だちに伝えたいという意欲が高まり、また、他者の遊びへも興味をもてるようになることを考える。そこで本時では、自然物を使った遊びを紹介して話し合う活動を通して、自然物の特徴を生かした遊びを生み出す楽しさや、自然の多様性や素晴らしさに気付くことができるようにしたい。紹介する時には、①作った物、②材料、③作り方、④遊び方、⑤工夫したことや、困っていることなどについて丁寧に話すように指導したい。また、友だちの発表に対して、質問や意見、気になったことを積極的に発言するように促し、話し合いの中から問いが見つければ、教師が焦点化し、全体でさらに話し合って深めるように導きたい。全体で確かめたいことがあれば、随時確かめられるように材料や道具を用意しておく。教師は、児童の発言を構造化しながら板書し、比べたり、関連付けたりできるように努めたい。板書された友だちが気付いた自然物の特徴や遊びから、別の遊びや遊び方の工夫を閃いたり、種類の違う自然物を組み合わせる新しい遊びを生み出そうとしたりするなど、学びが深まるよう意識したい。

4. 単元の評価規準

単元の 評価規準	ア. 知識・技能	イ. 思考・判断・表現	ウ. 主体的に学習に 取り組む態度
小 単 元 に お け る 評 価 規 準	①公園の秋の自然の様子や特徴、夏から秋へと季節が移りかわっていることに気付いている。	① 諸感覚を生かして、公園の秋の自然に関わり、他の季節と比べながら秋の自然を見つけ、秋のよさについて考えようとしている	①秋の自然を楽しみたいという思いや願いをもって、公園の秋の自然と触れ合い、秋の良さについて伝えようとしている。
	②自分たちの身の回りには多種多様な植物が生存していることに気付いている。	②身近な自然の特徴を確かめながら、それを楽しもうとしている。	②身の回りにある自然に興味をもち、進んでそれらを集めようとする。
	③身の回りにある秋の自然は、いろいろな遊びに利用できることや、遊びを工夫したり遊びを創りだしたりすることの面白さに気付いている。	③集めてきた自然物の特徴の違いを観察したり試したりしながら捉え、遊びを工夫しようとしている。	③秋の自然物を使った遊びを、楽しみながら創り出そうとしている。

5. 指導と評価の計画

次	時	○主な学習内容 ☆主体的・対話的で深い学びを促すための教師の支援	主に生かす身近な生活に関する 見方・考え方	評価規準 評価方法
第 一 次 秋 の し ぜ ん 見 つ け に 出 か け よ う	1	○校区内の公園へ出かけ、そこで様々な葉、実や種に会う。 ☆地域の公園で遊ぶことで、身近にある自然の移り変わりや自然物を認識させる。 ☆自然物を使った遊びを考える学習につなげられるよう、形状に特徴をもった自然物が自生している公園で遊ばせる。 ☆ビニール袋を配布し、採取したものを持ち帰ることができるようにする。	【身近な生活に関わる見方】 季節が夏から秋に変化することで、自分たちの身の回りの様子 が変化していることを捉える。 自分たちの身の回りには多種多 様な植物が存在することに気付 く。 【身近な生活に関わる考え方】 身近な自然物に変化することで 季節の移り変わりを感じ、また、 紅葉した植物の美しさや、すごし やすくなった気候から、秋のよさ について考える。	アー① 発言 ワークシート イー① 発言 行動観察 ウー① 発言 ワークシート

	2	<p>○学校に戻り、公園内で見つけたものを、スケッチと文章で観察カードに書き紹介し合う。</p> <p>☆紹介後は友だちのカードをいつでも自由に見ることができるよう、教室の後ろに掲示する。</p> <p>☆身の回りには様々な種類の植物があることに気付かせ、通学路や近所の公園などにはどのような植物があるのか興味をもたせる。</p>		
第二次 もっとおもしろい草や木のは、みやたねを見つけよう	時間外 個別 最適な 学び	<p>○通学路や近所の公園で植物を収集し、朝の会などで紹介する。</p> <p>☆生活科の学習が学校での授業時間だけで終わらないよう、普段通っている通学路、休み時間の校内、放課後や休みの日に遊びに行く公園などで見つけた植物の実や種、花や葉などを学校に持ち込み、学級で紹介させる。</p> <p>☆教室に持ち込むものが難しいものに関しては、クロームブックを用いて撮影し、発表してもよいことを伝える。</p> <p>☆教師が見つめてきた特徴のある種や実(サルスベリ、アルソミトラ、ツクバネ)などを紹介し、植物の多様性や不思議さ、自然の面白さに気付けるようにする。</p>	<p>【身近な生活に関わる見方】 自分たちの身の回りには、様々な植物が自生していることを捉える。</p> <p>【身近な生活に関わる考え方】 自生している植物が季節によって変化していることや、それらをもつ特徴を捉えながら、身近な自然を楽しもうとする。</p>	<p>アー②</p> <p>発言</p> <p>行動観察</p> <p>イー②</p> <p>発言</p> <p>ウー②</p> <p>発言</p> <p>行動観察</p>
第三次 秋のしぜんものをつかってあそぼう	3 4 5	<p>○集めた身の回りの自然物での遊びを考える。</p> <p>☆主体的な活動となるよう、自然物を集めた後、何かしたいことがあるのかを児童に話させ、児童の願いからの活動となるように導く。</p> <p>☆実物を多く用意しておき、実際に触りながら遊び方を考えられるようにする。</p> <p>☆児童が考えそうな遊びを予想しておき、必要になりそうなものは事前に準備しておく。</p> <p>(様々な材質の布、うちわ、送風機、爪楊枝、段ボール、空き箱など)</p>	<p>【身近な生活に関わる見方】 身近な自然物が遊びに利用できることを捉える。</p> <p>自然物がもつ特徴(色・大きさ・形・重さ・飛ぶ・くっつくなど)の違いを捉える。</p> <p>【身近な生活に関わる考え方】 自然物がもつ特徴を生かして、自分の遊びをもっと面白くしようと考える。</p>	<p>イー③</p> <p>行動観察</p> <p>ワークシート</p> <p>ウー③</p> <p>行動観察</p>

		<p>☆児童が自分たちで用意したいと言ったものに関しては、自分たちで用意してよいこととする。</p> <p>☆授業の終わりには、毎回振り返りとして、その時間で試してみたこととそこから気付いたことや気になったこと、次の時間に試してみたいこととそのために必要な準備物などを書かせ、児童の思考を教師が把握できるようにする。</p> <p>☆遊びを考えたり工夫したりする中で、自然物が持つ特徴を捉えさせ、遊びに反映させられるように助言する。</p> <p>☆児童の振り返りの中で、もっと実や種のことを追究したいという声があれば、個別に気になったことを試しながら、遊びに生かしてよい事とする。</p>		
個別最適な学び		<p>○遊びを工夫していく中で、個別に追究したいことがあれば追究する。</p> <p>※例としてひっつきむしをつかった遊びを考える児童がいた場合。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひっつきむしの正体は何だろう。 ・どうやってひっついてるんだろう。 ・ひっつくものとひっつきにくいものの違いは何だろう。 <p>などの疑問が生まれてくることが予想される。</p> <p>それらの疑問に対して、触る、割る、よく見るなどの観察とそこからの気付きを絵や文章で記録し、それをもとに友だちに伝えることができるように促す。</p> <p>☆拡大して調べたいという児童のためにルーペやデジタル顕微鏡を用意しておく。</p> <p>☆ひっつきやすい素材とひっつかない素材のものを用意しておき、児童に選択させる。</p>	<p>【身近な生活に関わる見方】</p> <p>よく見る、触る、割るなどの観察活動から自然物がもつ特徴を捉える。</p> <p>形状の違いによって飛んだり、回ったり、くっついたりすることを観察から捉える。</p> <p>【身近な生活に関わる考え方】</p> <p>捉えた自然物がもつ特徴を生かして、自分の遊びをもっと面白くしようとする。</p>	<p>イー③ ウー③</p> <p>行動観察</p> <p>ワークシート</p>

	<p>6 本時</p>	<p>○自然物を使った遊びを紹介して話し合う。</p> <p>☆作った物、作り方、使った材料、遊び方、完成まで試行錯誤したことなどを紹介させ、それに対して意見や質問をさせる。</p> <p>☆自然物の特徴を捉え、遊びに反映させているかに焦点を当てる。</p> <p>☆紹介の途中、全体で確かめたいことがあれば、確かめられるように材料や道具を準備しておく。</p> <p>(実や種などの自然物、児童が使用したその他の材料、ルーペやデジタル顕微鏡など)</p> <p>☆教師は児童の発言を自然物と考えた遊び、生かした特徴を構造化しながら板書し、比べたり、関連付けたりできるようにする。</p>	<p>【身近な生活に関わる見方】 身近な自然物が遊びに利用できることを捉える。</p> <p>自然物がもつ様々な特徴(色・大きさ・形・重さ・飛ぶ・くっつくなど)を捉える。</p> <p>【身近な生活に関わる考え方】 自然物がもつ特徴を生かして、自分の遊びをもっと面白くしようと考える。</p>	<p>アー③</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px auto;">ワークシート</div>
--	-----------------	--	--	---

6. 本時

(1) 本時の目標

それぞれの遊びを紹介して話し合う活動を通して、自然物の特徴を生かした遊びを生み出す楽しさや、自然の多様性や素晴らしさに気付くことができるようにする。

(2) 本時の展開

学習活動	○指導上の留意点(支援) 評価規準	働かせる見方・考え方
しぜんのものをつかったあそびを伝え合って、もっと楽しいあそびをつくろう。		
<p>1. 本時の学習内容を確認、互いのめあてを聞き合う。</p> <p>2. 自然物を使った遊びを紹介して話し合う。</p> <p>3. 本時のふりかえりをする。</p>	<p>○自分の遊びの楽しさを伝えたいという意欲を高めるとともに、他者の遊びへも興味をもてるようにする。</p> <p>○①作った物、②材料、③作り方、④遊び方、⑤工夫したこと、困っていることなどについて丁寧に話すよう指導する。</p> <p>○友だちの発表に対して、質問や意見、気になったことを積極的に発言するように促す。</p> <p>○話し合いから見つかった問いを焦点化し、さらに話し合って深めるように導きたい。</p> <p>○全体で確かめたいことがあれば、随時確かめられるように材料や道具を準備しておく。 (実や種などの自然物、児童が使用したその他の材料、ルーペやデジタル顕微鏡など)</p> <p>○児童の発言を構造化しながら板書し、比べたり、関連付けたりできるように努める。</p> <p>○友だちの発表を聞いて、新たに気付いたことや、気になったこと、次回試してみたいことなどをワークシートに書いて伝え合う。</p>	<p>【身近な生活に関わる見方】 身近な自然物が遊びに利用できることを捉える。 自然物がもつ様々な特徴(色・大きさ・形・重さ・飛ぶ・くっつくなど)を捉える。</p> <p>【身近な生活に関わる考え方】 自然物がもつ特徴を生かして、自分の遊びをもっと面白くしようと考える。</p>

今回の研究大会を通して、以下の成果が挙げられた。

①主体的に授業に臨む児童の増加

本校の研究主題である、「対話を通して、主体的に学習しようとする児童の育成」のために教材研究を行い、児童らの身近に生息している自然物を使った授業を展開した。その結果、授業中のみならず、登下校中や放課後、休みの日などの授業時間外にも、自然物の収集を行い、学校に持ってきて紹介する児童が多く見られた。また、休み時間にも校庭で植物を集めたり、自分たちが考えた遊びをクラスメイトと行い、意見を出し合いながら手直しを加えたりする姿が多く見られた。また、図書の時間には草花に関する本を借りる児童や、自分が作りたいもののために、家から材料を持ってくる児童の姿も見られた。これらのことから、教師主導で行うのではなく、児童が自ら考え、楽しんで学びを深めることができたように思われる。

②対話のスキルが向上した。

今回の研究授業を行う前までは、児童と教師の一对一のやり取りで授業を進めることが多く、児童同士が対話する場面を作ることができていなかった。それによって、教師の問いかけに対して単語で答えたり、他の児童の発表に対しても反応が無かったりしていた。児童同士の対話によって授業が進行するように教材研究を行い、教師が板書に徹して、いちいち児童の発言を復唱したり補足したりしながら授業を進めたりすることをやめ、自分の意見を伝える際には、丁寧に話すことを徹底して指導した。それらの取り組みによって、児童らは、「私は～だと思います。」と発表することができるようになり、また、それに対して聞いている児童も、「いいと思います。」「ちょっとちがうと思います。私は～だと思います。」などの反応を送ったり、「○○さんに質問です。～はどういうことですか。」などの、質問をしたりできるようになってきた。また、これらの様子は生活科の授業だけでなく、別教科の授業でも見受けられるようになった。

今後の課題としては、以下のことが挙げられる。

①単元ごとの授業数が増え、すべての単元が終わらない

児童主体でじっくりと納得いくまで対話しながら授業を進めることで、予定していた授業数では到底収まらず、急ぎ足で進めてしまう授業が多くできてしまった。

②発表の苦手な児童への配慮

児童主体で話し合いを進め、全員が納得できるまで話し合おうとすると、1時間話し合いだけで終わることもある。対話スキルの身についてきた児童にとっては、学びとなる1時間になるかもしれないが、まだ身につけていない児童にとっては、ただひたすら友達が意見を戦わせているのを座って聞くだけの1時間となってしまう。また、人前での発表を苦手としている児童もいる。振り返りやワークシートの記述を見れば、非常に良い着眼点をもっており、全体に意見を言うことができれば、みんなで考えを深めることができそうなことでも、それが授業の中で表出してこない。そういった児童に対しては、こちらからうまく後押しを行ったり、代わりに全体に話したりしてもいいのではないかと考えた。

以上のことから、特に低学年では、ある程度授業の本筋（めあて）へ導いていけるような教師のかじ取りが必要であり、また、対話スキルの身につけていない児童や、人前での発表を苦手としている児童らが十分に学べるよう、個別の支援、個別の配慮が多く必要であると考えます。そういった児童も含め、学級全体で「主体的・対話的で深い学び」ができるよう、これからも研究を続けていきたい。